

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 初期侵略戦争文学の情况(法政大学国文学会創立40周年記念特集)

著者	高崎 隆治
雑誌名	日本文学誌要
巻	16
ページ	70-76
発行年	1966-11-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019168">http://hdl.handle.net/10114/00019168</a>

## 初期侵略戦争文学の情況

高 崎 隆 治

この国の、大陸及び南方に対する積極的な侵略攻撃は、一般に、一九三一年（昭6）から一九四五年（昭20）までの十五年間とされている。

虚構の事実を口実に、一九三一年満州事変（柳条溝事件）を引き起した軍部は、翌三二年、国際植民地都市の上海とその周辺に触手をのばし、天皇制軍国主義の中国東北部（満州）侵略に対する世界の耳目を華中にそらせるための事件（上海事変）をさらに重ね、植民地（満州）獲得を強行的に完了しおおせた。これが侵略戦争の第一段階であることは言うまでもない。

これより前、コミンテルンは二七年テーゼにおいて、既に侵略戦争の危機を告げており、たとえば、左翼文芸家総連合の反戦創作集「戦争に対する戦争」（一九二八年）も、テーゼに刺激されての所産だが、満州侵略のさ中に起草された三二年テーゼは、全面戦争の危機を激越な口調で説いていた。

侵略戦争の危機はまさに目前であった。にもかかわらず、この国のほとんどの文学者は、迫り来る暗黒におそれおのきながら、なすべきことをなし得ず、時流に迎合・妥協し、あげて軍国主義コー

スの渦中に押し流されて行きつつあった。

侵略主義に対する文学精神のまっこうからの対決を避けて、文学的結実はどのような形ででも約束されるはずはない。

後日、石川達三の「生きている兵隊」が発禁筆禍を被った時、知識人・文学者が驚愕した事実は、人々の無知やおろかしさの証左以外の何ものでもなかった。

かくして、一方、侵略戦争を積極的に肯定し支持する作品は、既に一九三一年（昭7）に現われていた。直木三十五の「日本の戦慄」がそれである。

黒島伝治が反戦の先駆なら、直木は好戦のラッパ手であった。直木はこの作品の序で次のように述べている。

——これは、私が、今までに発表した私の作以外を歩まうとする。むしろ、今までの作よりも、私の、本当の欲求から作られる——  
「今まで」「の作以外を歩まう」としたのはなぜか。直木は続けて言う。

——戦敗の苦汁を知らぬ国民、あけ切らぬ朝から、箶を抱へて、施米の列に立つまでに到らぬ国民、それが、いつくるか？ 来た時に何うなるか？ 私はそれを考へて戦慄してゐる。日本の戦慄であ

ると同時に私の戦慄である。――

直木を侵略戦争の積極的支持者に駆りたてたものは、敗戦の「戦慄」であった。侵略のいけにえとなって飢餓に苦しむ中国民衆の悲惨な現実だった。しかしながら、直木は、その中国民衆の姿に自らを重ねあわせることによって、侵略を阻止しようとするまっとうな姿勢をとるのではなく、逆に、他を侵すことによって敗戦の「戦慄」から逃れようとする非合理的な、目的のために手段を選ばぬ「欲求」のとりことなつたのである。むろん、直木の方向はファシズムであり、小児的な被害妄想意識はあわれみの情すら禁じ得ないが、直木の主体的真実がどうあろうと、その意図は客観的にファシズムへの扇動となつていくことが知れる。しかし、ここで注目しなければならぬことは、直木の神経は決して過敏にすぎてはいなかったということである。つまり彼は、帝国主義侵略戦争が、どのような方法でどの方向に動くものかを明らかに予知していたのである。序の終りの部分を引用しよう。

――「満州事変」の起る年の前年、から稿を起してゐた「太平洋戦争」に描くべきそれらの物が「上海事変」によって、舞台を上海にとると同時に、実戦の経験者に、私の意見を述べ、私の想像が少しも誤つてゐなかつた喜びをもつて急速に書いた――（傍点引用者）

これはどういふことか。満州事変の前年といへば一九三〇年である。直木は既にその時、中国侵略から始まりやがて米英を敵とする太平洋戦争の開幕を予見していたものの如くである。のみならず、戦場の現実には彼の想像通りであつたという。この部分のみで、直木を典型的ファシズム文学者と規定するも、早計ではないと思われるが、今少しく「日本の戦慄」に立入つてみたい。

この作品は何人かの主人公をもち、作者自身に言わせれば「社会

小説」ということだが、その中心的な主人公は左翼労働運動に關係する若い労働者である。父は日露戦争の廃兵で、妹はカフェーの女給という設定になつてゐる。従つて一家の生活はかなり苦しい。この主人公が戦争に疑念を抱きながら、上海事変に応召し、実戦を経る過程で戦争を肯定・賛美するようになるという筋に仕立てられてゐる。一種の転向小説とも言えるが、作者の意図は好戦にあつて、ために侵略を合理化させる強引な独断を伴つたところでは、まゝくあつていふ仕様に終始する。直木はそれを最も簡便な、對話で一方が相手をねじ伏せるといふ方法で描いた。たとえば、「ファシヨは民心の顕現だ」と暴言を吐かせ、さらに「今日、日本が支那から圧迫されるといふことは日本の生存に影響することだ。」と続けさせる。そして、相手に「支那を日本が圧迫してゐるんだ」と反論させ、ただちに「圧迫してゐなければすぐ圧迫されるんだ。支那は、日本から圧迫されても失ふ所が少いが、日本が支那から圧迫されるという事は」「日本の生存がおびやかされる」と、超論理を展開する。「だが、いつも戦をしかけるのは日本からだ。」と反撃させる。や、たちまち今度は「戦争で立遅れといふことは絶対禁物だ。」と牙をむいてみせるといふ具合である。

ここには正常な議論はない。反対者は必ず沈黙するか安易に妥協するだけである。あたかもファシストの指導者の演説の如くである。このような侵略者の発想は引用すればきりがなく、が、もう一つ引例しよう。次の言葉など、まさしく強盗の論理以外の何ものでもあるまい。

――支那の排日・毎日が戦争より罪惡でないといふ理由はない。連盟は何をしたか？ 日本が排日から受けた損害でも賠償してくれる人ならいいが――

ここに至って「日本の戦慄」は、まごうかたなくファシズム文学である。自らの存立のためには、徹底的に相手を殺りくしてやまぬという思想が全篇に流れる「戦慄」すべき好戦文学の見本である。

大規模な侵略は満州の全面占領によって一段階を終えたとは前に述べた。帝国主義は次の段階に入るべく、着々と準備を整えつつ、やがて、ほぼ五年を経て中国への全面戦争に突入する。

この間にプロレタリア文学は解体され、事態は最悪の方向へ急速に傾斜していった。

一九三七・七・七、華北に侵略を開始するや否や、戦線は加速度的に拡大し、加えて翌八月には上海に攻略の火ぶたが切られるに及んで、多くの文学者たちは、やがて恣意的・強制的に戦場体験を経ることとなった。

文学者の戦場体験は、一般に時点を異にする二つの事態、即ち、いわゆる「ペン部隊」と、報道班員としての徴用とに分けられる。前者は漢口攻略戦（一九三八・一〇）に際し、情報部の幹旋・勧誘の下に、主として通俗大衆小説作家、例えば菊地寛・久米正雄・吉屋信子・白井喬二といった人々を中心として編成された恣意的グループである。又、後者は、太平洋戦争突入直後の強制々度であり、この段階においては、もはや好むと好まざるとにかかわらず、文学者は一からげされ南方諸地域に投入される結果となった。

ペン部隊の作品は、林芙美子「北岸部隊」「戦線」、杉山平助「揚子江艦隊従軍記」、白井喬二「従軍作家より国民へ捧ぐ」、尾崎士郎「文学部隊」等に代表されるが、一方、徴用作家の作品は、一九四二年以降、火野葦平、北村小松、山岡荘八、上田広、丹羽文雄、井伏鱒二、里村欣三、大木惇夫、井上康文、北原武夫、今日出海、

豊田三郎、武田麟太郎、等によって大量な刊行をみるに至った。侵略戦争文学の量的氾濫は、一九四二年をピークとしてこの時期に集中している。

ところで、これらの作品群は一樣に戦争讃美・肯定の好戦文学で、そこに何らの価値すら見出せないのは、例えばこれらすべてが「生きている兵隊」以後の作品であり、本質的には侵略文学である「生きている兵隊」すら発禁となった事実が、容易にそのことを証明するのである。

ところが、この時点以前において、文学者のうちの何人かは、いち早く戦場の体験を経ており、その結果としてのルポルタージュ風の作品が既に発表されていたのである。彼等は、雑誌社又は新聞社の特派員という形で戦場に赴いたわけで、石川達三も又その一人であったことだが、「ペン部隊」以前、さらには「生きている兵隊」以前に発表された作品中に、以後の作品との質的な断絶を見出すことは、果して不可能事であるだろうか。初期侵略戦争文学に期待される何らかの曙光があるとすれば、その一切はここに集約されるはずである。

今、その時期の略年譜を単行本に限って掲げる。

一九三七（昭12）

11月 悲風千里

尾崎士郎

12月 戦争の横顔

林 房雄

一九三八（昭13）

4月 苦 命

柳山 潤

5月 戦火に立つ

海野啓一

9月 麦と兵隊

火野葦平

9月 歌集塹壕の砂文字

柳原白蓮選

10月	一等兵戦死	松村益二
11月	黄塵	上田広
12月	従軍作家より国民へ捧ぐ	白井喬二
11月	揚子江艦隊従軍記	杉山平助
11月	土と兵隊	火野葦平
12月	詩集大戦の詩	中 勘助
12月	征野千里	谷口 勝
12月	戦線	林芙美子

先に述べた如く、「生きている兵隊」事件は一九三八年三月であり「ペン部隊」従軍は同年9月である。ファシズム権力は「生きている兵隊」によって、文学精神の圧殺を図り、一方に戦争への誘導を試みたのもあった。が然し、この年譜においても知られるとおり、「生きている兵隊」以前には、林房雄と尾崎士郎の作品しか存在しない。従ってここではこの二作について考えることにする。

尾崎は「悲風千里」の序に次のように述べている。

——私の見たものは壮烈と悲惨とを兼ね合わせた戦争のすがたではない。そこにあるものは硝煙弾雨の中から聞える雄叫びと呻き声を一蹴して猶且つ進まねばならぬ民族の必然である。——略——無限に伸びようとする歴史の運命の中に、われわれは生命を埋めることによって、人間としての使命を全ふすることよりほかに生きる道はないであらう。——

ここには侵略に対する懷疑も戦争に対する本能的な恐怖もない。あるものはただ、戦争を必然として肯定しようとする諦観だけである。したがって尾崎は、直木のようにファナチックな興奮も示さない営みや、戦局の推移を、人間の意志をい。中国の自然や、避難民の

超えたものとして静かに容認するだけである。時に中国民衆の悲惨な現実を目撃し嘆息をもらすことはあっても、尾崎にとってすべては「歴史の運命」である。一切を「民族の必然」であるとすると発想からは、積極的・好戦的たり得ずとも、戦争批判の立場を導き出すことは不可能である。尾崎は、日本軍を賞揚することもなく、中国兵を憎悪もせず、しかも冷静な立場に立つことを願ったものの如く、残された唯一の道である詠嘆に自己を埋没させることで、かうじて僅かに苦悩を表白したが、それを厭戦と呼ぶにはかなりの距離が認められる。然し尾崎が、戦場の憂いを托した杜甫の詩（馬より下る古戦場、回顧すれば但だ茫然たり、風悲しんで浮雲去り、黄葉わが前に落つ）に共鳴し、「悲風は戦場の一角から起るのではなくて私の心の奥から起るのである」と述懐していることは、傍観者を越えたヒューマンな一面を物語るものであり又このことは、いわゆる通州事件の感想で、冷静さを失うまいとする作者の、控え目ではあるが、正鵠を得た一般には数少ない反省的意見とも通じるものがある。通州事件は通州における日本人居留民百八十人を殺りくした反乱事件で、当時東京に在った彼は「この事だけをもってしても膺懲の師を起すに足る」と思ったが、「悲風千里」の中では「何故このやうな事態を生じたかといふことを冷静になって考へるやうな余裕は、おそらく誰れの心にもなかったであろう」と、つとめて批判的たらんと志す意図がうかがえる。

ところで、上海地区に赴き、銃弾の下に直接身をさらした林房雄は、「戦線で何を見たか。」林はまず「戦争の横顔」——副題、文学者は戦線で何を見たか——の冒頭で、砲弾のさく烈に耳を覆い、負傷兵の血痕に目を覆って、「性も根もつきはてたといった形で」「げ

「つそりぐったりして」「何もする気が起」らなくなっていたと、戦争の恐怖を正直に告白する。が、やがて「戦はざる国民には滅亡があるのみです。一国の非戦論は敗戦主義と亡国に通じます。どんなに厭でもどんなに怖しくとも戦はなければなりません。」と、扇動者の論理をもって飛躍する。あなかも、直木三十五と口裏を合わせたかのような思考方法がここにはある。「軍人こそ真の平和論者だ。」と口走るに至っては啞然たらざるを得ない。然し、直木と林が酷似する発想を抱く根源は一体どこに求めるべきだろうか。

直木の場合それは敗戦の「戦慄」であった。林も又、常人を超え、生理的恐怖感が、どうやらその因子であるようだ。

自己の憶病をあからさまにさらけ出すことはよい。が、それはまともなら当然の帰結として厭戦につながるはずである。然し、林の場合は、直木と同様、正常に思考は働かず、逆上の反応を示して理性を喪失するという、一種の錯乱のとりことなるものようである。

一般に、恐怖心の吐露は、素朴な心情のあらわれとして、威武高で空疎な虚勢に数等優る真実の声として受取られ勝ちであり、それはそれとして積極面を保有するものであるが、恐怖心は戦場にどれほど馴れた兵士にもあるものだということを知らながら、そのみを一貫して強調することは、戦争という非人間的情況の一切に対する批判や思考を拒否した、文学者にとって最も重要な基本的姿勢の欠如を意味する低次の現実認識といえる。

一体、林には、現地に到着する以前において、既に冷静を欠く心情があった。侵略開始直後に発行された同年九月号の「改造」で述べている、山川均・向坂逸郎・中野重治等の戦争に対する見解を、「理性的にして批判的な態度にちがいない。」と評しながらも、

「僕はおそらくこの種の知識階級の選良諸氏とは体質的に異つてゐる。」「召集令が来たならば喜んで出征しようと思つてゐる。」「戦争の横顔——と記している。

兵士という絶体絶命の境地ではなく、従軍記者という観戦者の余裕が、彼を容易に戦場へ赴かせたのであろうし、又、その立場に在ったからこそ恐怖はより並みはずれた形で彼を支配したにちがいないが、林が戦場へ持参したものは明らかに文学者の眼ではなかった。極論すれば、それは単なる野次馬根性に過ぎないといえる。林にとっての戦争は、自ら傷つくことは恐怖中の恐怖だが、その半面スリリングな一種の見世物であった。だからこそ、「日本に帰る日が近づくことはなんとしても嬉しかった。」林は、帰ってくると、「途端にまた行きたくなる」わけである。

空襲下に「念仏をとなへ」「まったく自分という人間の価値を疑った」時から、完全に自己を否定し去った林は、侵略に無条件に全面屈服した。したがって「日本には人民戦線はいらぬ。国民戦線でたくさんだ。」と、ヒステリックな絶叫をしつつ、その、戦場の「全経験を一句に要約すれば」「戦争は厭だ」ではなく、「支那は厭だ」という権力者の優越的思想への帰順となるのである。

尾崎には、中国民衆に対するあからさまな殺りく思想はない、戦争を運命と観じながらも、その運命に支配される中国とその民衆や兵士に悲哀を感じ、「白骨を照らす明月の光」に自己の心情を仮託して佇立した。侵略を容認しながらも、進んで妥協はせず、客観的であろうとした尾崎と、戦闘の渦中で自己を見失った林との差異はここにある。

文学者にとって、物をみるということが、物の本質を知ること

ある以上、本質をつかみ得ぬ者のルポルタージュは、単なる目撃談の域を出ることは不可能である。

ところで、この時点において、軍事的、社会的情況下に、描き得る限界と描き得ぬ限界の接点を、「生きてゐる兵隊」に求めることは常識だが、「戦争の横顔」や「悲風千里」よりほぼ一年遅れて発表された火野葦平の「土と兵隊」が、侵略戦争肯定の文学でありながら、一般に定説となっている戦争文学（当時の）の最高峰「麦と兵隊」をしのぐ佳品であることを立証して、初期侵略戦争文学の情況を補足したい。

判じ物めくが、こういう一節がある。

——私は赤ん坊の泣き声を頼りに地面を這って行った。近づく  
と、私は、月光の中に、横に倒れてゐるその瀕死の母親が、道に転がって居る赤ん坊の方に手を差し延べて、何か口の中で歌ふやうに  
眩きながら、赤ん坊をあやして居るのを見た。私は電流に弾かれたやうに、異常な感動に衝たれ、胸の中に何かはげしく突き上げて来るものを感じた。——中略——私は何か見えない力に引きずり出されるやうに、再び壕を這ひだした。私は前よりもっと姿勢を低くし、地面に身体を摺りつけるやうにして又そこへ行った。瀕死の女は私には全く気づかない様子だ。近づいてみると、先刻までは道の上に転がっていた赤ん坊は、母親の腕の中に抱き取られてゐて、それは母親が消えなるとする最後の渾身の力を振り起して抱き寄せたに違ひないのだが、さうして尚も、母親は相かはらず何か眩きながら、赤ん坊をあやしてゐるのだ。しかし、その声も、あやしてゐる手も、非常に弱々しくなつてゐるやうに思はれた。私は投げ出されて居る蒲団を解き、殆ど身体をむき出しにしてゐる赤ん坊をぐるぐ

る巻きに巻いてやった。もう一枚の蒲団を母親の上に被せた。——  
中略——昨夜の女は赤ん坊を腕の中に抱いて、あやしてゐる恰好の  
仮死んで居た。赤ん坊は眼をくるくる動かし、我々の通過するのを見て、時々こにここと笑つたりした。私は、顔を反け、大急ぎでその横を抜けた。——

引用が長すぎたが、中国軍の機銃に誤射された母親に、危険を冒して作者火野が蒲団を掛けに出向く場面である。「顔を反け」ずには戦争ができなかった火野と、後年、太平洋戦争の段階で、軍属として「打倒米英」を叫んだ彼とは別人の人間性がここには働いている。「土と兵隊」は、火野の「戦争文学」の第一作である。発表の時期からいえば、「麦と兵隊」に約三ヶ月ほど遅れたが、「土と兵隊」には、一兵士としての人間的感情が流れていた。「麦と兵隊」が、軍報道部員としての、銃を執る兵士ならざる一種の特権者の立場に立った眼で捉えられた戦場であるのに反し、「土と兵隊」には火野の庶民性が随所に露呈する。むしろそれは、あくまでも感情であり感覚の範囲にとどまるものではあるが、戦争の残酷性に向けられた批判は、「土と兵隊」に関する限り皆無とは言えぬところに、この作品の積極面があるのではなからうか。ただし、この作品が、「生きてゐる兵隊」以後のものであることは、当然、削除となつた部分においてのみ、そのことを裏付ける証左を得るべきであろう。

——私はふいと、この二人だけはここに残して行かうかと考へた。然し私は両肩にぶら下るやうに縋る二人の兵隊を連れて表へ出た。兵隊はしきりに首に手を当てる、殺さないでくれ、と身振りをした。私は、よしよし、といふやうに首肯した。少年兵の悲しみにつぶれた顔に、かすかな喜びに似た影がかすめたやうに思った。私は胸の中に説明しやうのない、淋しさとも、怒りともつかぬ感情が

渦巻くのを感じた。――

火野が突撃して占領したトーチカで捉えた中国兵である。ところがこの後にかんりの削除がある。戦前版（文芸春秋昭和十三・十一月号及び改造社発行本）では明らかに脱落が感じられる部分だが、戦後のもの（新潮文庫）ではこうなる。以下、該当部分の全文を掲げる。

――寒さで眼がさめて、表に出た。すると、先刻まで、電線で珠数つなぎにされてゐた捕虜の姿が見えない。どうしたのかと、そこに居た兵隊に訊ねると、皆殺しましたと云った。見ると、散兵壕のなかに、支那兵の屍骸が投げこまれてある。壕は狭いので重なり合ひ、泥水のなかに半分は浸って居た。三十六人、皆殺したのだろうか。私は黯然とした思ひで、又も、胸の中に、怒りの感情の渦巻くのを覚えた。嘔吐を感じ、気が滅入って来て、そこを立ち去らうとすると、ふと、妙なものに気づいた。屍骸が動いてゐるのだった。そこへ行つて見ると、重なりあつた屍の下積みになって、半死の支那兵が血塗れになって、蠢いて居た。彼は靴音に気付いたか、不自由な姿勢で、渾身の勇を揮ふやうに、顔をあげて私を見た。その苦しげな表情に私はぞっとした。彼は懇願するやうな眼付きで、私と自分の胸を交互に示した。射ってくれと言つて居ることに微塵の疑ひもない。私は躊躇しなかった。急いで、瀕死の支那兵の胸に照準

を付けると、引鉄を引いた。支那兵は動かなくなった。山崎小隊長が走つて来て、どうして敵中で無意味な発砲をするかと言つた。どうして、こんな無残なことをするのかと言ひたかつたが、それは言へなかつた。重い気持ちで、私はそこを離れた。――

先の引用部とならんで、「土と兵隊」の中での圧巻である。しかし、この程度の批判的態度すら認め得られぬ情況では、プロレタリア文学庄殺以後の全戦争文学は、すべて侵略戦争文学であると断定しないわけにはいかない。

ともあれ、共に侵略文学ではありながら、そこには三者三様の差異がある。そして、直木・尾崎・林と、侵略戦争文学の旗手とも評される火野との異相もそこには明らかに存在する。

報道班員でもなく、軍の斡旋によるものでもない、一文学者として、かなり自由な立場にあつた尾崎や林、特に林と、全面戦争突入以前に侵略を鼓吹した直木は、時流への妥協順応の範疇を越えたフアシヨ作家以外の何ものでもない。そこからやがて、軍部の文学者利用（ペン部隊）といういとぐちがほぐれ、次いで強制（作家徴用）への道が通じ、好むと好まざるとにかかわりない体制への組み込みが行なわれ、侵略戦争文学の里程碑が次ぎ次ぎに林立する結果が生まれたのであつた。（一九六六・九・一〇）